

星 環

ウル リム (響)

第10号

1999年2月10日発行

題字：康秀峰

心のシャッターを開けて

長野 加代子

私の所属している聖トマス教会の男子会の人たちが、昨年5月に聖ガブリエル教会を訪ねました。それは一昨年大阪教区宣教協議会の時の話から、聖ガブリエル教会の方々と親しく交流し、在日韓国・朝鮮の方々に日本と日本人が犯した罪に対して謝りたいということで訪ねたのです。

その時、私の教会の一人の信徒が大きな衝撃を受けたと聞き、話を伺いました。その方は現在77歳で、実際に戦場にも行かれた方です。その方は「自分では戦争のことや韓国・朝鮮の人々のことについてもよく認識していて理解があると思っていたが、聖ガブリエル教会のある年配の方から『日本人を見ると憎くて憎くて仕方がない。日本人には言っても分からないから決して本当の事は言わない。パーンと心にシャッターを閉めてしまう。』と言われ、今までは甘かった。心を打ち明けて話しをしていた……思っていたが、そんなものではなかったんだと、あの時から考え方がかわりましたよ。でも、聖ガブリエル教会の方々は『聖トマス教会の人たちが訪ねてきて話しをしようとするその態度から希望が見えてきた。聖トマス教会との絆が深まった。それはクリスチャン同志だからだろうか。』とおっしゃいました。だれであれ日本人であれば、子孫として、また歴史の事実として犯した罪から逃れることは出来ませんよ。聖ガブリエル教会を訪れたことは大きな意義があったと思

いますよ。戦場で闘った者も、銃後で苦労した者も年々少なくなっていく今、生き残っている者が伝えていかなければいけないとあせりを感じています。」と話して下さいました。



私も最近まで日本が戦争中に韓国や中国、アジアに対してしてきた残虐な行為を知らなかったし、今もあまりよく知っているとは言えません。私のすぐ近くにも太平洋戦争の体験者がいらっしゃるのですから、その方に体験や知っておられることをぜひ聞かせて下さいとお願いしました。

また、今度は聖ガブリエル教会の方が聖トマス教会を訪ねてこられるそうです。その時は男子会といわず、女性や若い人にも声をかけて、ぜひ一緒に話し合いに参加したいと思っています。朝鮮侵略・植民地支配という歴史の事実、またそれにより今なお多くの痛みを持った人々が知らなければならないのです。いままで知らなかった事実をすこしでも多く知る努力をして心から謝り、心のシャッターを開けてお付き合いして下さいる気持ちになって頂きたいと願うものです。

(ながの・かよこ 石橋聖トマス教会信徒、

日本聖公会大阪教区婦人会会長)

時のしるし

いよいよ1900年代最後の年に突入した。新しい世紀は「共生」の世紀といえるだろう。

ここ数年、「共生」にこだわって、共生論を収集してきた。ところが不思議なのは、共生という理念は一定のコンセンサスが得られているにもかかわらず、一方で世の中は「大競争時代」に入っていくということだ。共生と競争とは相反する論理だが、その二つが共存できるところに日本社会の矛盾がある。さらに不可解なのは、共生という言葉がむしろ経済界から発せられ、経済界で注目されているという事実だ。

共生論の元祖と自称する黒川紀章は、21世紀の世界の新秩序が共生であるとして「共生とは対立、矛盾を含みつつ競争、緊張の中から生まれる新しい創造的な関係」という。

このような共生論は、グローバルな見地からの共生論である。ここからは人間が見えてこない。多数ある共生論の中で、この対極にあるのが震災直後に語られた金守良氏の共生論だ。「日本人と在日韓国・朝鮮人は共に死んだ（共死）だけでなく、共に生き延びた（共生）」という一言にあらわされる共生論である。弱者の視点に立ち、実践の現場から湧出したいへん重みのある共生論である。この両極ともいえる二つの共生論の違いはどこだろうか。前者は、地球規模というところから出発するから、人間一人ひとりの顔が見えてこないが、後者は人間から出発して地球規模に向かっている。

地球規模の反対を生活規模とでもいうとすれば、生活規模から出発して地球規模に至ることが大切なのではないだろうか。グローバリゼーションを礼賛し共生を提唱した日本経済のリーダーたちは、生活規模での思考ができなくなってしまった。グローバル化は、一人ひとりや一つひとつを大切にすることを忘れ、全体でしか物事を見なくなる。そのときには、一人ひとりの人間を押しつぶす

魔物と化するのである。グローバリゼーションを標榜した市場経済原理のなれの果てが、現今の経済状況であり、社会的に弱い立場にある人々の生活を今までになく脅かしている。

一方、教育界では競争が至上とされてきたことへの反省から、これからはゆとりを重視し、「生きる力」を基軸にした学習が展開されるという。異文化間教育、国際理解教育など、新しい教育の形態がそろって掲げている教育目標は共生である。これらの主唱者たちはブームに乗っているのではなく、学問的に真剣に目標を探っていくと、必然的に共生に到達したのだろう。しかし海外の多文化教育をそのまま持ち込み、国内の課題の固有性を無視したケースも多い。教育界のキーワードのひとつは国際化であるが、これもグローバリズムを掲げて、教育界が国際化に対応できる人材の育成を言い、経済界はグローバリゼーションに対応できる人材を求めてきた。両者は見事に一致しているが、果たしてこれで共生に向かうことができるのだろうか。共生社会創造は、新しい世紀を迎える私たちに課せられた最大の任務である。そのためには、言い古されたスローガンではあるが、"Think globally, act locally." すなわち「地球規模で考え、地域で行動せよ」ということが求められる。地球規模ということばかりを先行させて、足元にあるほんとうに大切なことを置き去りにしてしまってはならないのだ。

紅白で聞いたKiroroの歌が頭から離れない。

ほら、足元をみてごらん、

それがあなたの歩む道

ほら、前を見てごらん、

あれがあなたの未来

グローバル化をめざして一目散に走ってきた私たちに、原点回帰を迫る声として聞こえるのだが、私の読み込みすぎだろうか。

(まつやま・けん)

日本聖公会京都聖ステパノ教会信徒)

共生生活の視座から

松山 献

精神科診療所にて…

水上 然

アルコール依存症の講義の中でこんな話を聞いた。「毎日毎日父親は酒を飲んで、母に暴力をふるう。それを側で見続けている5歳の女の子が一人いた。夜の間に、父親の酔いが覚めるのをはだしで町を歩きながら母と子は待った。翌朝やっぱり母と娘は父親のもとに戻っていく。大きくなり、女の子は見えないものが見え、聞こえないものが聞こえるようになった。」

私は大人になったこの少女に会いたくてたまらなくなった。この人の話を聞いてみたい、そして彼女の生きざまを知りたいと思った。

それから3年。先輩ケースワーカーと家庭訪問に行った。何を聞こうか、何を話そうかわくわくしていた。彼女と話ができる。が、ぐっと見上げられた彼女の大きな目にその視線に私は言葉をなくしてしまった。真夏の35℃、閉め切られた部屋。汗がひたたり落ち、いるだけで体に埃をかぶる。冷蔵庫の中はゴキブリの巣になっていた。そして、何も聞かないまま、何も語れないまま、次の日の朝、道ばたで彼女は亡くなった。

これが、私の社会福祉の現場との出会いだった。「あんなに病気の苦しみがわかるんか、あん

たに私の辛さがわかるんか」そう問いかけられているように思えた。簡単に人生と人の生きざまと出会えると思った私がバカだった。でも、逃げ出すわけには行かなかった。あの時の真剣な眼差しが何か私をおしとどめる。最期のあの瞬間にいあわせることのできる私たち、だからこそ最期に何か受け止め得るのではなからうか。何かに触れて触れられて、私が変わった。それが精神科の魅力かもしれない。

学校の一室で彼女と出会って6年。ただ単に会って話したいと思った19歳。ほんの一瞬出会って打ちのめされた22歳。今は25歳。ほんの少しではあるけれど、彼女と共に時間を過ごせるようになった。

これから私は私の人生のページをめくる。恋愛、結婚、出産していく中で、どんな彼女に出会えるか、また、彼女はどんな私に出会うのか。精神科は強烈な出会いの世界。

少しでも変化を求める人は、いつでも遊びに来て下さい。「会って話す」それがとても意味のあることだと私は信じています。

(みずがみ・つづる)

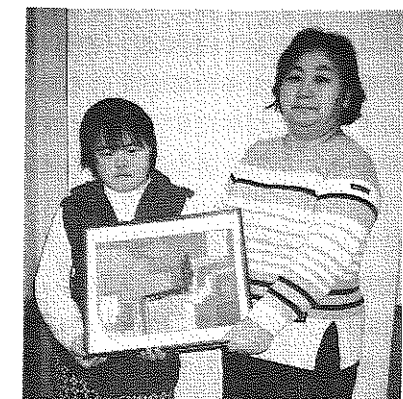
キム診療所ソーシャルワーカー)

山根由香さん 受賞おめでとう……………絵画教室

「阪神大震災」という題で出品したクレヨン画が「1998年 神戸 ザ・ハートフルルネッサンス作品展」において300点もの作品の中から、みごと「ハートフル賞」にさがやきました。

「根気よく、いっしょうけんめい描きました。」「初めての出品だったのですが、こんなにすばらしい賞をいただいて感激しました。」

「これからも楽しく絵を描いていきたいと思っています。」 (母)



街造り、街に関わる、人に関わるとは・・・ 阪神大震災と私たちの信仰

草地 賢一

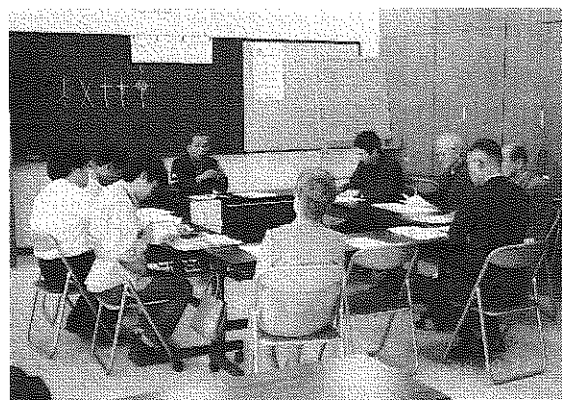
◆人の時と神の時◆

震災から3年9ヶ月、これまでの活動と活動しながら考えてきたことをお話ししたいと思います。まず、地震は大変おそろしいものでした。地なりというものを初めて聞きました。そのとき私は神戸市北区の自宅におりました。幸いなことに家が崩れるなどの大きな被害はありませんでした。当時わたしは、神戸にあるPHD協会という国際農村開発協力をするNGO団体に勤めていました。車で北区の自宅から事務所に向かいました。六甲の山越えです。そして、神戸の街がみえるところに立つと、既に長田のあたりから煙が2本ほど上がっていました。時間は10時ごろでした。それを見たときに、神様は「このことのために私を神戸に連れ戻したのだ」と感じました。日本基督教団の牧師として、10年前に神戸に戻ったのも、NGO民間の活動のネットワークを神戸で作ったのも、神戸の行政の委員に関わったのも、みな神様がそうさせたのだと感じたのです。神様が私を神戸に戻したのは、この状況のなかで働きをするためなのだと感じました。ミッションが神から与えられる時を「カイロスの時」といいますが、それは、流れて行く人の時と垂直な神の時が交わる時です。まさにこのカイロスの時です。山の上で神戸の街を見ながらそんな不思議な体験をしました。

◆震災における宗教者の役割◆

そして、17・18日は、状況を把握するためにいろんなところを回りました。しかしすでに長田

は大火災で、長田から西に行くことはできませんでした。これは個人の力でどうできることを超えていると感じました。それで、さまざまな人々によびかけて、1995年1月19日に阪神大震災地元NGO救援連絡会議というものをつくりました。この時私は、この不幸な出来事を通して教会は具体的で直接的な証をする時に變えていかなければいけないと思いました。それで教会やYMCAなどにも呼びかけて発足しました。まだそのときは電話もありませんでしたし、



講演する草地賢一氏（中央向かい側）
ボランティア講座 第1回

何が連絡調整となるのかもよくわからないまま、とにかくボランティアの連絡調整をしようと始めたのです。最初に来たのは袈裟に身を固めた僧侶でした。私は「西の兵庫や長田へできるだけ近づいてそこでお経を上げてください」と答えました。それが最初の調整でした。吊いの問題は大変重要なことですが、震災直後から今日に至るまで、見も知らぬ人々の死の問題や吊いの問題に対して教会は責任を持ったでしょうか。

残念なことにほとんどの教会は持たなかったと思います。とすると教会が本質的に持っているはずのボランティアの精神や信仰というものが、あの混乱の中でいったい何の役割を果たしたのでしょうか。

1998年の1月17日に「宗教者による神戸メッセージ」というのを呼びかけました。神主、僧侶、神父、牧師など、専従で宗教に関わる者で話し合い、「震災を生きる宗教者の集い」ということでメッセージを出しました。私たちは話し合っているうちに吊いの問題を含む地域の問題を本当に担い得ているのだろうかと感じるようになりました。「地域の再生なくして教会の復興はない」というメッセージが出たりしましたが、しかし、地域の再生について具体的なイメージを持ち得ていなかったのではと思います。これとは、対極にあるのがカトリック鷹取教会です。その神田神父は、「地域の再生というのは、人々が戻ってきて、日常の生活が営まれるようになることだ。そのときまで教会の聖堂は建てない。」と言って、コミュニティー再生センターの事務所みたいなことをやっています。そこにはキリスト教とは直接関係のない団体の事務所がいくつも入って活動しています。ひとつはFMわいわい。コミュニティーのFM放送局です。そして震災直後から人々の生活を映画に撮りつづけている映画監督青池組の事務所。アジア、とくにフィリピンの人々の支援に関わるアジア女性自立プロジェクトの事務所。そして在日のみならず滞日もふくめた神戸外国人定住促進支援センターがあります。

◆信仰の実践として◆

それら私の行動の核にあったのは、小さくさせられた人、貧しくさせられた人、弱くさせられた人、その人々に注目をし関わり、そしてその問題をいっしょに担うということです。私はとくに震災後の1年、礼拝がどれほど大切なものが繰り返し実感させられました。日曜の礼拝を第一にとらえて礼拝につらなり、そこか



ボランティア講座 第2回
一障害者と共に一

ら現場に遣わされていく。それが私はキリスト教の原則だと思うんです。そこをベースにしたときにおのずとすべての働きが教会から託されたミッションとして、信仰の実践となっていくのだと思うのです。

私は聖公会の長田センターの開所式の日、紫の衣を着けた主教さんやカラーをつけた牧師さんが大勢いる中で、「そういう格好は今日限りにしてください。長田で働くことは、カラーをつけて牧師でありますということではありません。災害から立ち上がろうとする人に必要なのは、同じ地域で生活をともにしながら、活動を共にしていくということです。パウロの言うような、キリストの香りのする働きをしてほしい」という挨拶をしました。教会が本当に地域の中で働こうとした時には、キリスト教の衣をとり、キリスト教以外の地域の人々と様々な組織とどう共存していくか、ということが必要です。日本の教会では教会専従でなければ牧師ではないと思われていますが、ドイツのマンハイムでは教会専従の牧師は半分です。あとは地域の課題に遣わされている牧師です。この牧師たちがネットワークを組んで宣教の業がなされています。日本は人口の0.8%がキリスト教徒という国ですから、教会専従であることが牧師の主流であってもいいと思うのです。しかし、そうでない人を排除してはいけないと思うのですが、残念ながらそうではありません。

◆活動の広がり 自律する市民◆

今回の経験から「アクション・オリエンテッド・ダイアログ」ということを痛感しています。活動のただ中で課題を担う人々が対話をしていくということです。この震災からの出会いというものは会議の場などではなく、まさに活動の現場での出会いでした。それぞれが必要と感じた現場に出かけた先で出会うのです。対話は協働を生み、連帯を生み出します。そして時にはよびかけ合う関係もできてきます。さまざまな人々との活動をつづけているとそのボリュームの大きさを感ずります。なかでも『市民とNGO

えば近所の人たちが助け合うところからです。政府と企業だけがやってきた日本の社会のなかで、政府や企業よりもいち早く市民として立ち上がったのです。ボランティアは自分で自分を律します。第1セクターや第2セクターの行状を監視し、おかしければ異議申立てをする。そして必要に応じて告発をし糾弾をする。そして対案を提示する。そんな自律的な市民が第3のセクターとなる時代に入ってきたと思います。

私は、イエスという人はボランティアの原形ではないかと思うのです。イエスは誰にも言われなくても虐げられている人、見捨てられている人の側に行きました。なぜなら神から言われているからです。私はボランティアとは何かと問われたら次のように答えることにしています。「ボランティアは言われなくてもします。しかし言われてもしません。」

私は自律的な市民の第3セクターとしての役割を、それを教会が現在では出来なくとも将来それを担う可能性があると思います。それを信じていると思っています。

◆さいごに◆

キリスト教の信仰をもっている個人としてこの震災からの3年9ヶ月、弱い人、虐げられている人、見捨てられた人、周辺に押しやられた人をいつも思い描きつづける教会生活を送りたいと願ってきました。そして、これからも大事にしていきたいと思っています。これからのキリスト教会は、いろんな人と協働しながら、第3セクターとして「塩」になれるのか。あるいは身を焦がして「ロウソク」になり「光」になれるのか。匿名でどう生きることができるかというところに大事な課題があるように思います。

(くさち・けんいち

阪神大震災地元NGO救援連絡会議代表・
日本キリスト教団神戸東部教会協力牧師)

1998年10月31日 ボランティア講座にて

文責：編集部



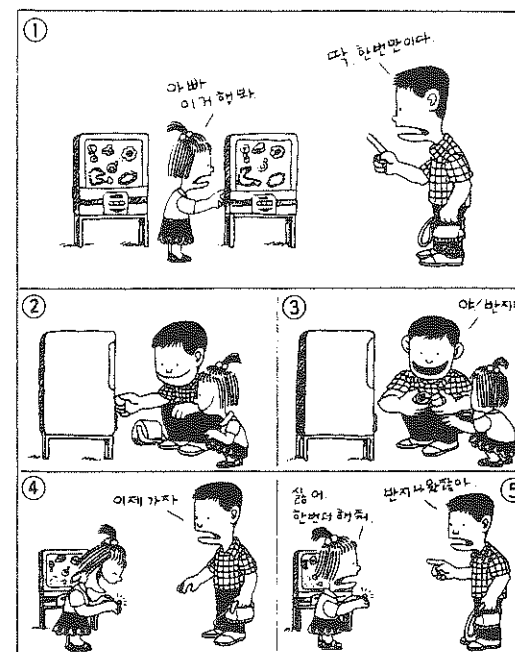
ボランティア講座 第3回
—高齢者と共に—

の防災国際フォーラム』というのを98年の1月まで3年続けました。何十団体もの人があつまり、フォーラムの組織委員会を作りました。教会にも呼びかけました。そうやってフォーラムを形成しながら宣言を作っていたのです。フォーラムに参加した人たちでいろんな分科会を作り、その報告からキーワードを抽出して文書にし、これを3回ぐらいたたきなおして作りました。多くの人々によって作られたこの宣言は神戸の宝だと思っています。

これまで、政府・行政という第1セクターと企業という第2セクターのみですべてのことがされてきました。しかし何もかも政府や企業がやってきた社会というのはたいへんいびつな社会です。神戸の復興がどこから始まったかとい

連載マンガ⑩

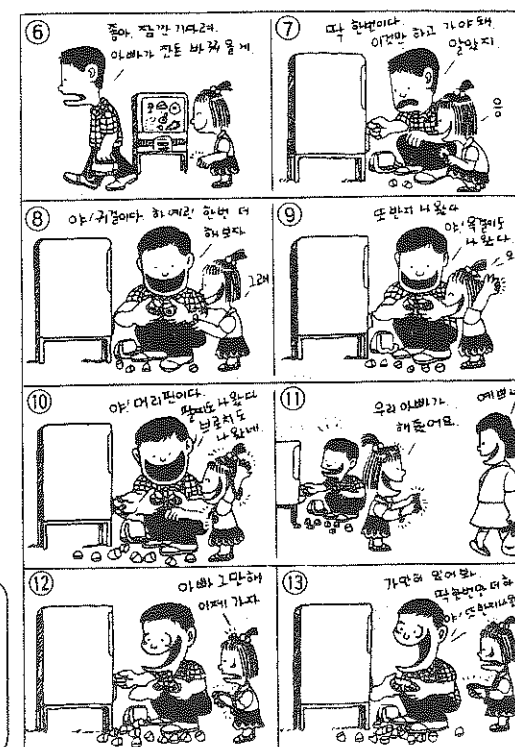
슬롯머신 (スロットマシン)



- ① おとうちゃん、これしてみて。
1回だけだよ
- ③ やあ、指輪だ
- ④ さあ、行こう
- ⑤ いやや、もう一度してよ。
指輪が出てきたでしょ。

- ⑥ よっしゃ、ちょっと待ちや。
お父ちゃんが小銭に替えてくるから
- ⑦ 1回だけだよ！
これだけして行くで、わかった？
- ⑧ やあ、イヤリングだ、
ハエリン、もう一度してみよう
- ⑨ また、指輪が出てきた。
ネックレスも出てきた。わあ
- ⑩ ヘアピンだ。腕輪も出てきた。
ブローチも出てきたよ
- ⑪ かわいいね。
お父ちゃんがしてくれたのよ
- ⑫ お父ちゃん、それくらいにしようよ。
行こうよう
- ⑬ 黙るとき。もう1回だけ、
やあ、また指輪が出てきた。

作者：崔正鉉 (ちえ・じょんひょん)
パンチョギ (もう一方) の愛称で親しまれる。1960年韓国大邱生まれ。娘の誕生以降子育てをマンガで表現。ユニークな描写と男性優位の韓国社会で家事分担が評価。1995第1回平等夫婦賞受賞。



＝マイノリティー・フォーラムに参加して＝

趙 寧

◆旅のはじめに◆

'98年9月15日、函館の温泉旅館で一泊して16日
サハリン（旧・樺太）へ。

今回のサハリン訪問は、'93年「国連・国際先住民年」を記念して北海道沙流郡二風谷で行われた「二風谷フォーラム」、'95年バンクーバー＆アラートベイでの「日本・カナダ マイノリティ・フォーラム Culture in Struggle」に続く「日本・サハリン マイノリティ会議」への参加が目的。

沖縄から高良勉（詩人）、山下正雄（まーちゃん：ミュージシャン）、金城馨（大正区在住：関西沖縄文庫主宰）、在日韓国・朝鮮人として不肖・私と、作家の李恢成の二人、アイヌ民族はチカッ美恵子（刺繍家）、小川 基（トンコリ奏者）、佐藤たつえ（東京早稲田のアイヌ料理レストラン「レラ・チセ」主宰：アイヌ伝統文化伝承者）はじめ19人、そしてジャーナリスト、学者…総勢40人の大所帯。サハリンでは朝鮮族（カレイスキー）、先住民のナナイ、ニブヒ、そして、日本時代にサハリン（樺太）に渡ったアイヌ——の諸民族が参加し、3日間の会議と、芸



サハリン州都
ユジノ・サハリンスクの庁舎

術・文化交流のタベ、フィールド・ワーク等が計画された。なによりも「人と人とのおつきあい、文化の交流」を第一原則としたこのフォーラムも、これで3回目。私たち「常連の同窓会」に加えて、今回は「各マイノリティの若者の交流を」をサブ目標にした。

◆サハリンは寒かった！◆

函館からアエロ・フロートのプロペラ機で2時間、ユジノ・サハリンスク（旧・豊原）の空港は伽藍堂の静けさ。降りる客も我々「マイノリティ・フォーラム」参加者以外は、全くまばら。第一印象は「さぶ～」である。気温の寒さもさることながら、ひとけの無さと空港事務に携わるロシア人達の無表情が共に「さぶ～」なのだ。

バスでホテルに。ソ連時代に労働組合が使っていたという「ツーリスト・ホテル」は、庶民的と言えば聞こえはよいが、断水がしょっちゅう起こるし、マフィアが自由に出入りするし…超高級ホテルがあるそうだが、値段がとても高い。因みに昨今の経済事情の下で実質的には「ロシア・マフィア」が経済を牛耳っているとか。「とにかく街では注意してください。特に趙さん、絶対に喧嘩腰になってはいけませんよ」とサハリン在住30数年のSさん（旅行会社の副社長）に諭される。

昔取った杵柄のロシア語を思い出しながら、水とパンを買う。通じた、通じた、自分のロシア語が通じた！自分でも呆れるぐらい喜ぶ（わてもミーハーでんなあ）。ふと見ると、向かいの通りに露店でキムチを売ってるお婆さんが。今度は朝鮮語で「いくらですか」というと「何処から来た？日本だって？韓国人か、日本人か？」

と微笑ましく話しながら10ルーブルでキムチを
買う。

◆多民族の島・サハリン◆

李恢成さんの故郷ホルムスク（旧・真岡）の
小高い丘に「27人の朝鮮人虐殺慰霊碑」がひっ
そりと立っていました。「僕はサハリンへ来ると、
帰ってきた、という感慨を持つ」と李さん。こ
の碑は、韓国のある団体が'96年に建てたことが
銘記されてあって、李恢成さんが'95年に来たと
きは木製の祠のような小さな碑があったとか。
敗戦の際「統治に害を及ぼす奴らだ」と日本兵
がソ連軍に取り入るために、ここに住む朝鮮人
を殺したという説明書きに身震いするうち、ア
イヌの友人達が祈りを捧げる。

ホルムスクは日本時代に王子製紙の大工場で賑わった。工場跡地はそのまま残っていて、4年前までは使われていたという4本の巨大な煙突が突き出ている廃墟が、風景の大部分を不気味に覆っている。『風の谷のナウシカ』の一場面を想い出した。その製紙工場で使う木材の伐採の仕事に、朝鮮人が主に動員された。今、サハリン州に約4万人のカレイスキー（朝鮮族）が住んでいるらしいが、もちろん日本時代にやってきた人々とその子孫だ。ヤポニア（日本人）は約四百人いるそうで「引き上げられなかった」人々とその子孫。住民は「民族登録」で自分のアイデンティティを示すのだ。私たちの通訳をしてくれたHさんは「民族登録と名前はヤポニア（日本）ですけど、父親はカレイスキーです。趙さんとはなぜか朝鮮語で話したい気分になりますね。」と親しげに話す。彼は日・朝・露の完璧な通訳士。Hさんに限らず、日・朝・露のトリリンガルがこの地では一般的だ。先住民のニブヒ、ウイルタ、ナナイ、そしてアイヌ、それにスラヴ、日本、朝鮮を加えて7つの民族がこの島には「共存」している。後に聞いた話では、登録上では数十の民族が存在している。

『サハリンにおける諸民族の歴史と現状』という興味深い総論的報告をしてくださったサハ



27人の朝鮮人虐殺慰霊碑

リン大学のR女史は、カレイスキーと結婚したからR姓になっただけで、民族登録はヤポーニア。交流会ですばらしい踊りと歌を披露してくれたナナイ・ニブヒ混合舞踊団の団長・Kさん（ポロナISK在住）は、ナナイ語の民族名、日本時代に強要された日本名、ソ連時代のロシア名、そして結婚して朝鮮名の4つの名前を持つ。彼女はわかりやすく「庶民の歴史と民族の誇り」を会議で報告して一同の涙を誘った。因みに元・日露国境の北緯50度の直ぐ下にあるポロナISK（旧・敷香）の「オタスの杜」に、日本時代に先住民が強制移住させられたので、今もそこに先住民が多く住んでいるのだ。オタスの杜の「土人学校」では日本語と日本名が強要され、徹底した同化教育がなされた。「同化教育」の話になると沖縄・アイヌ・朝鮮も同じような経験をしたわけで、参加者一同本当に「解りあえる」のは、不思議でもあり当たり前でもあり…今回も「帝国の大きさとリアリティ」を再認識した次第。

Kさんは日・朝・露は勿論それにナナイ語を加えて、4つの言語で生活している。Kさんに限らず、40歳以上、あるいは高等教育を受けたマイノリティなら「複数言語」は当たり前。日本語を専攻しているサハリン大学の学生さん（マイノリティ）達の流暢な日本語にも驚かされ。3、4年の教育でここまで上達できるとは…

こかの国の「国際化」とは「月と蠶・雲泥」の差だ。

◆マイノリティの本音◆

3日間の会議のあいだ、サハリン側の報告者が口をそろえて「民族平等」を言う。私は「ウソつけ！これこそ連戦時代の方便の名残か」と思いながら、ふてくされていた。ところが最後の夜の「民族交流会」あたりで、そろそろ本音が出てきたのである。ナナイの若い友人は「ロシア人には帰るところがある。私たちはここで生きるしかないのだ。ロシア人が来て良かったことは何もない」とポツリと語る。彼のお父さんもカレイスキーなのだが、自分の民族登録はナナイにした、という。彼はナナイとして、しかも民族文化の伝承者として誇り高く生きている。R女史も「被害者と言えば、私も被害者ですよ」と。Hさんは「韓国移住を真剣に考えています」——やっぱり、皆それぞれの苦勞を背負って生きているんだ。

「公の場ではおとなしく、お上の言うとおりに喋っておいた方がいいのです」——異口同音のこの言辭は「方便」などという次元を越えて「生き方の哲学」と化しているようだ。日本～ソ連～ロシアと激しく統治形態が変わる中で、マイノリティは自分の文化と生き様を守る術を打ち鍛えてきたのだ——私はふてくされていた自分が恥ずかしくなった。不自由であることは確かだろう。しかし、その中で「己」を守るには…彼らの言辭は「方便」ではなく「知恵」だった。

最後の夜ぐらい贅沢しようと、みんなでバザールに買い出しに行った。「ブルコギ（焼き肉）」の材料を求めて、苦節3時間——というのも、肉・にんにく・コチュジャン（芥子味噌）・醤油・砂糖などは簡単に見つかったのだが、胡麻油がない！…やっとあった、あった！中国製の150ミリリットルで200ルーブル。めっちゃ高い！けど最後の贅沢や、2瓶買った。腕をふるって「今サハリンで考えられる、最高の素材で作った焼き肉や！」と自慢した。すると、ホテ

ルの厨房のおばさん達が「カラショー、フクースナ（ええなあ、旨い）！」と褒めてくれた。「兄ちゃん、ワタイら先にちょっとつまみ食いたけど、ええやろ？」…と言うてた（と思います…ワタイ全部ちゃんと聞き取れなかった）。

ナナイ・ニブヒの舞踊と歌謡、マーちゃんのサンシンと歌、北海道と東京のアイヌ・ウタリの歌舞、小川基のトンコリ（樺太アイヌの弦楽器）、そして私の歌——サハリンの夜空に、＜恨：ハン＞が美しく響いた。極めつけは、何と言ってもHさんの『大阪しぐれ』の熱唱！私の「橋」への返歌でした。

フォーラムの会場となった「故郷会館」の入り口に「旅人よ、歩みを止めて無念のうちに極寒の地で倒れた同胞の声を聞け」という書き出しの石碑があった。サハリン最後の日、ハンゲルで刻まれたこの碑に私は刮目し、黙礼した。今回の旅の、その意味の全てを物語っているようだった。9月22日、2時間の時差と2時間の飛行時間で、午前11時にユジノを発って、同じく11時に函館に着いた。9月も末だというのに函館は29度！サハリンと日本の温度差が、「歴史・文化・生活の差異」を教えているようだった。（ちょう・ぱく）

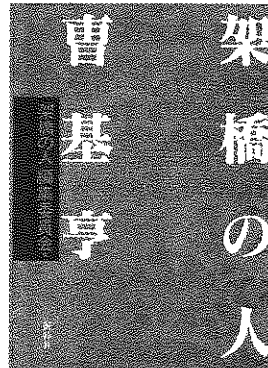


筆者の趙博さん

大阪考⑧

高二三

架橋の人 曹基亨
「架橋の人」編集委員会
(新幹社刊)
定価2500円+税)



私が学校を出て、初めてついた職場は『季刊三千里』の編集部だった。三千里社で、大阪という、何よりも歴史家の姜在彦先生である。姜在彦先生は『季刊三千里』の編集委員であったから、月に1度は必ず編集会議に出席するために上京されていた。ところが、まったくのイレギュラーなかたちでお会いする機会があったのが曹基亨先生であった。

初めてお会いしたときの曹基亨先生の印象は、東京の朝鮮奨学会の方々とはちがって、官僚的な(組織人的な)感じのしない親分肌な人柄で、何でもござれ、という人のように見えた。案の定、二度目にお会いしたときは、突然電話がかかってきて、「明日上京するから会おう、その時は君の履歴書を持ってきたまえ」というものだった。私の結婚相手を見つけて下さるというのであった。そして、何軒もの店をハシゴして別れた。のちに伺ったところ、私の酒癖を見ようということであつたらしい。その後、一度も曹基亨先生からお見合いの話はなかった。私は酒癖が悪いと見られてしまったのだろうか。それにしても。あの時の私の履歴書はどこへ行ってしまったのだろうか……。

そんな思い出のある曹基亨先生であった。三千里社の慰安旅行、三千里社の主催する催しの際は、必ずかけつけて下さった。したがって年に二、三度はお会いするということが10年ちかく続いたことになる。

曹基亨先生に最後にお会いしたのは、お亡く

なりになった年の四月、大阪で行われた済州「四・三」事件の集会の折りであった。会場で曹基亨先生を見かけた私は『済州島四・三事件』(新幹社で出している本)をもって行って挨拶をした。先生は二次会にも参加してくださった。「先生も済州出身だったんですか」と尋ねたところ、「生まれは全羅道だが、済州島で育ったんだ……」と申された。そうだったのかと初めて知った。帰りがけ、先生は私のポケットにお金を入れて「心ばかりのカンパだよ」と言って、先に帰られた。タクシーを拾うところで別れたのが最後となった。

曹基亨先生がお元気な頃、私は新幹社で本を出しませんか、とお誘いしたことがあった。しかし先生は、他の出版社からも依頼されて出す約束をしているのだが、なかなか実現しないのだよと言われた。その時は、けっこう見栄っばりの先生だな、と思ったが、いまになってみると、本当は書けない事ばかりで、自身で活字にしてそれを残すことがはばかれたのだろう。

それが期せずして、曹基亨先生がお亡くなりになったことで、曹基亨先生の遺稿・追悼の本を作ることになった。一周忌に間に合わせるための出版であった。一周忌の集いに参加したところ、親戚の順子おばさんと結婚している金吉雄さんにあった。曹基亨先生の主礼で結婚したのだそうだ。そうか、いつも東京ふうに向きにお付き合いしていたから先生との距離が縮まらなかったのだ。大阪ふうに向きにつき合っていれば、ちがった関係が生まれていたのかもしれない。思い返してみれば私の親友の南隆幸君も朴一君も曹基亨先生の女婿なのである。

(こ・いーさむ 新幹社代表)

『架橋の人』は聖公会生野センターでも取り扱っています。

◆各地の後援会活動より——— 聖公会生野センター横浜教区友の会

横浜教区では聖公会生野センターの支援は、有志の集まりである「横浜教区友の会」が中心になって行っている。会長は吉田孝子さん(林間バルナバ教会)チャプレンは相原俊次司祭。会費は年2千円で、これで会の運営をしている。これとは別にセンター支援の募金(1口5百円)を募り、会員の有志と会員外の有志の献金をセンターへお送りしている。

聖公会生野センターと交流し支援すると共に日韓の歴史を学び、また在日韓国・朝鮮人の多住地域である川崎市の「ふれあい館」等を通して在日の方々との交流を目指している。1996年には念願の「聖公会生野センター現地研修」を実施した。「日韓の歴史を学ぶ会」は会員が自分で調べたことを報告するスタイルで運営しており、これまでに7回実施した。昨年は大阪の聖ガブリエル教会信徒の張聖子さんのお話をお聞きした。また教区内を中心にした日韓関係史跡を訪ねる「歴史散歩」も、毎年1回ペースで実施している。これまでに大磯・寒川(神奈川)、日高・高麗川(埼玉)、三ッ池公園の韓国風庭園(神奈川)、浅川巧の足跡(山梨)、関東大震災の朝鮮人慰霊碑(神奈川)を訪れた。今年は奈良の明日香の里まで足をのばす予定である。

また、関東三教区生野委員会と神奈川外キ連に委員を派遣し積極的に参加している。

会員には日韓関係や在日についての情報を出来るだけお伝えするよう努めており、「ウルリム」はセンターの現状を伝える重要なメディアなので会員と支援募金者にお送りしている。

会長を中心とする役員は、教区内の教会に向き、センターの状況や当会の説明をし、また入会をお願いしている。日韓の正しい歴史と在日の現状を学び、全ての人々が共に生きる社会を目指すことが教区や教会、さらに個々の信徒にとって福音宣教の重要な課題となることを願いながら活動を続けている。

(小山俊雄 こやま・としお)

横浜教区聖アンデレ教会信徒、
聖公会生野センター横浜教区友の会副会長)



浅川巧誕生の地記念碑

(1997年秋 山梨県)

◆余韻

新年早々、マルセカンパニーの芝居「北の宿にハトが泣く」を観た。売れない芸人たちが集まったお通夜の晩をモチーフにした物である。いつもながらその「社会」で隅に追いやられている人たちをほのぼのと笑いで包むマルセ太郎さんの演出には恐れ入る。もちろん楽しく笑った2時間だった。今年も「隅に追いやられてい

る人たち」を大切に1年間働いていきたいと思います。今年も宜しく！ちなみにマルセカンパニーの芝居「猪飼野物語」が8月に大阪で上演されることになった。生野の猪飼野に住む在日の家族を楽しく描いてくれそうだ。今から楽しみである。(ピックアンチャ)

聖公会生野センターへのご支援をお願いします

◇後援会費

年額 1口 3,000円(個人) 1口 10,000円(団体)
郵便振込00960-0-133429 「聖公会生野センター後援会」

◇自由献金

郵便振込 00910-1-321780 「聖公会生野センター」
銀行振込 三和銀行 東大阪支店
普通預金 3711311 「聖公会生野センター」

発行所：聖公会生野センター

〒544-0003

大阪市生野区小路東1-17-28

TEL06-6754-4356/FAX06-6754-4357

E-mail:cyj02040@nifty.ne.jp

発行人：木村 幸夫

編集人：大橋 襄